



部族民通信Youtube
人類学講座

2025年10月
~2026年7月

— サルトル著
弁証法理性批判
Critique de la Raison
Dialectique
第一章 Progressive
Régressive 部の結語
I



Jean-Paul Sartre
1905~1970 パリ
(アレクサンドルIII橋上にて
Jean Puillonと1948年)

Sartre Critique de la Raison Dialectique
弁証法理性批判前進後退の結語

サルトル「弁証法理性批判」
Critique la Raison
Dialectique
La Méthode Progressive-
régressive 前進後退の
Conclusion

部族民通信2026年6月

Sartre Critique de la Raison Dialectique
弁証法理性批判前進後退の結語

本章は頁数にして40を超す、すべて頁の紹介は難しいので、章頭の一文をまず引用する。

« Nous acceptons sans réserve les thèses exposées par Engels dans sa lettre à Marx : les hommes font leur histoire eux même, dans un milieu donné qui les conditionne »

マルクスに宛てた書状でエンゲルスが表明する主題を、我々は予断なしに受け入れる。それは「人間は囲まれる環境に条件付けられ、その中で己の歴史を造る」

Sartre Critique de la Raison Dialectique
弁証法理性批判前進後退の結語

本章は頁数にして40を超す、すべて頁の紹介は難しいので、章頭の一文をまず引用する。

« Nous acceptons sans réserve les thèses exposées par Engels dans sa lettre à Marx : les hommes font leur histoire eux même, dans un milieu donné qui les conditionne »

マルクスに宛てた書状でエンゲルスが表明する主題を、我々は予断なしに受け入れる。それは「人間は囲まれる環境に条件付けられ、その中で己の歴史を造る」

ヒトが歴史を造る = エンゲルス

Sartre Critique de la Raison Dialectique
サルトル 弁証法理性批判

参考スライド
共産主義..使
用

思想、精神の 座標	真理 主体	対象 客体	作用	
ヘーゲル	モノ 世界	精神	弁証法 (疎外)	} 対立
キルケゴール	個 精神	存在	信仰 (おののき)	
マルクス	唯物史観	歴史弁証法	集団行動 Praxis	} 融和
サルトル (思考手順1)	個の Praxis	存在	自由	

Sartre Critique de la Raison Dialectique
サルトル 弁証法理性批判

参考スライド
共産主義..使用

思想、精神の座標	真理主体	対象客体	作用	
ヘーゲル	モノ世界	精神	弁証法 (疎外)	対立
キルケゴール	個精神	存在	信仰 (おののき)	
マルクス	唯物史観	歴史弁証法	集団行動 Praxis	融和
サルトル (思考手順1)	個の Praxis	存在	自由	

Sartre Critique de la Raison Dialectique
サルトル 弁証法理性批判

参考スライド
共産主義..使用

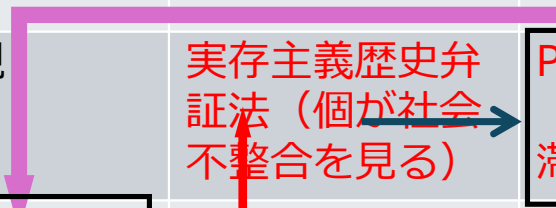
思想、精神の座標	真理主体	対象客体	作用	
ヘーゲル	モノ世界	精神	弁証法 (疎外)	対立
キルケゴール	個精神	存在	信仰 (おののき)	
マルクス	唯物史観	歴史弁証法	集団行動 Praxis	融和
サルトル (思考手順1)	個存在	存在	自由	
	個 歴史座標を探る Praxis	実存主義歴史弁証法 (個が社会不整合を見る)	Pratico-inerte (行動の後の停滞)	



Sartre Critique de la Raison Dialectique
サルトル 弁証法理性批判

参考スライド
共産主義..使用

思想、精神の座標	真理主体	対象客体	作用	
ヘーゲル	モノ世界	精神	弁証法	対立
キルケゴール	個精神	存在	信仰 (おののき)	
マルクス	唯物史観	実存主義歴史弁証法 (個が社会不整合を見る)	Pratico-inerte (行動の後の停滞)	融和
サルトル (思考手順)	個 Praxis	存在	自由	
* 参考カント	先験	世界	考える力 entendement	



Sartre Critique de la Raison Dialectique
弁証法理性批判前進後退の結語

本章にてもマルクス主義と実存主義が語られる

本文を通り過ぎ、章末に設けられる8頁（103～111頁）の「Conclusion結語」は簡潔にして簡明にまとまっているので、この部分を本章の紹介として解説します。

Conclusionの第一行： « Depuis Kierkegaard, un certain nombre d'idéologues, dans leur *effort pour distinguer l'être du savoir, ont été amenés de mieux décrire ce que nous pourrions appeler la « région ontologique » des existences* » (page 103).

キルケゴール以来一定の数の思想家が、存在から知を峻別する思索の流れを追求していた。それら学究の目的は「存在の本質論」はいかに可能か—に収斂される。

Sartre Critique de la Raison Dialectique
弁証法理性批判前進後退の結語

キルケゴールをSNS (Google Ai) に探る：「実存の父」と呼ばれる。自分の真理（主観的真理）を重視し、根源的な「絶望」や「不安」と向き合う信仰…中略。ニーチェ、フッサール、ヤスパーズの名が続きサルトルに至る。フツーツーに理解されている実存主義の系譜です。

自らの思想源流はキルケゴールに遡るとサルトルは述べている。本結語でも対象への取り組みにまさにキルケゴール姿勢と感じられる描写にであらう。一方でおそれなど感性による自己存在への向き合いに、サルトルは批判も入れている = 既投稿。

Sartre Critique de la Raison Dialectique 弁証法理性批判前進後退の結語

章頭と結語の第一行を合わせ、読み進め方を考えると；この結語での表現はヘーゲルの弁証法、その反主題としてキルケゴールの姿勢、そしてマルクス歴史弁証法が大半となるーと予測する。目下の文節は抽象語の連なりで、何を語るかはチンプン状態に陥るが、弁証法みたいならヘーゲルかマルクスか、実存的ならキルケゴールか。こうしたヤマカン^①を当てて読み直すと文意が浮かんでくる。これら先達の論点、思想に沿いつつ、自身の論旨を組み立てていると思える。

Sartre Critique de la Raison Dialectique
弁証法理性批判前進後退の結語

こうした文の流れでサルトルは自説を組み立てる。まず存在のありか、これまでの実存主義著作とはここで一線を隔す（本書執筆の動機はポーランド出版社の依頼、実存主義とマルクス主義の融合を目指した。序章＝既投稿）。ここでpraxis行動が浮き上がってくる。

以下、主要な文節を引用してサルトルの「実存主義的」歴史弁証法を、ヘーゲルマルクスらの思考と重ね合わせて追う。

Sartre Critique de la Raison Dialectique
弁証法理性批判前進後退の結語

« D'abord *parce qu'il* (homme) *peut être historique*, c'est-à-dire *se définir sans cesse* par sa propre praxis à travers *les changements subis ou provoqués et leur intériorisation* puis le dépassement même *des relations intériorisées*. Ensuite parce qu'il se caractérise comme l'existant que nous sommes » (page 104).

まず、ヒトは歴史的であらねばならない、己本来のpraxis行動によって、間断無しに自身の定義の確認する、変化によってもたらされ触発される事象を、自己に取り込み乗り越えるヒトは発展する。そのうえで我々がそうであるかに、存在する者として性格づける。

Sartre Critique de la Raison Dialectique 弁証法理性批判前進後退の結語

« D'abord *parce* qu'il (homme) *peut être historique*, c'est-à-dire *se définir sans cesse* par sa propre *praxis* à travers *les changements subis ou provoqués et leur intériorisation* puis le *dépassement même des relations intériorisées*. Ensuite *parce* qu'il se caractérise comme *l'existant que nous sommes* » (page 104). まず、ヒトは歴史的であらねばならない、己本来のpraxis行動によって、間断無しに自身の定義の確認する、変化によってもたらされ触発される事象を、自己に取り込み乗り越えるヒトは発展する。そのうえで我々がそうであるかに、存在する者として性格づける。

部族民：個人感想を語る；「自身の定義の確認、取り込み乗り越え、存在する者、性格づけ」はキルケゴールを読む気分になった。さらに個からの発信と繰り返し、弁証法的実存の骨格がpraxisに乗せられていると読む。

個がいかに歴史に参画できるか、その道筋をサルトルは本著で展開する。「ヒトは歴史的」であるがその原点。個の位置する座標は歴史流れの中に定められている、その座標を知りそして確定するための手段（méthode）がpraxisです。認識から始まり行動に進展するpraxisの様が記述（後文）される。

Sartre Critique de la Raison Dialectique
弁証法理性批判前進後退の結語

鍵語のpraxisについて

Praxisはマルクスで用いられる（もとはギリシャ語、プラトンなんかが使ったかも、この辺り無視）は変革を伴う「労働」であって概念的で、サルトルは認識を起点とする思索行為に肉付けし、「必要、否定、乗り越え、卓越」など工程分解し、具体性を加味した。さらにこの（経時的思考）手法を（共時を専らとする）人類学に応用し「歴史弁証法人類学」の創始を提案する（=これらが後述される）。

Sartre Critique de la Raison Dialectique
弁証法理性批判前進後退の結語

« il va de soi que l'existentialisme pose lui-même la question de ses relations fondamentales avec l'ensemble des disciplines qu'on réunit sous le nom d'anthropologie ... les sciences de l'homme ne s'interrogent pas sur l'homme : elles étudient les relations des faits humains et l'homme apparaît comme un milieu signifiant (déterminable par des significations) dans lequel des faits particuliers (structures d'une société, d'un groupe, évolution des institutions, etc.) se constituent »

Sartre Critique de la Raison Dialectique 弁証法理性批判前進後退の結語

« il va de soi que l'existentialisme pose lui-même la question de ses relations fondamentales avec l'ensemble des disciplines qu'on réunit sous le nom d'anthropologie ... les sciences de l'homme ne s'interrogent pas sur l'homme : elles étudient les relations des faits humains et l'homme apparaît comme un milieu signifiant (déterminable par des significations) dans lequel des faits particuliers (structures d'une société, d'un groupe, évolution des institutions, etc.) se constituent »

いわゆる人類学の名で集合される学問との互いの関係性、これは根本部分であり、実存主義は自らに問いかける。これは大いにあり得る = 中略 = ヒトの科学（いわゆる人類学）はヒトを問うものではない。人の事象同士の関連、さらには意味を持つ場で人がどのように表現されるのか、それらの意味合い（社会構造、集団の組成、制度の変遷など）はいかにして継続されるかを対象とする。

Sartre Critique de la Raison Dialectique
弁証法理性批判前進後退の結語

この後の文節で「人類学は発展するにつれ人間を否定する方向」に向かう。
« anthropomorphisme » にその起因があると指摘する。直訳すると人間形態主義、ここでの形態は身体有様ではなく、信仰、制度、慣習など社会などの人が介在する制度の形態と見たい。
部族民：人類学とはレヴィストロースが掲げる「構造」人類学に他ならない。
Anthropomorphismeの例として婚姻には制度が介在しそれは交叉いところ婚にあるとレヴィストロースは主張する。このあたりをサルトルはmorphisme形態重視、モノ対象(objet) を学んでいるだけで、ヒトの現実réalité de l'homme に向かっていないと批判する。

Sartre Critique de la Raison Dialectique
弁証法理性批判前進後退の結語

筋道から離れるが、一の言葉について述べる。《 Savoir 》（知）。大文字で始まる知はヘーゲルの絶対知を表す。一文を紹介すると《 *partant de même Savoir* 》絶対知からすら離れて…。

この語の含意をサルトルは「自己完結（en-soi）する知、固定し発展しない凝り固まった知」と決める。一方、自身の知は「savoir人の真実」、こちらは常に考え、思考を発信し、社会に立ち向かう「行動する知」となり、

自己の歴史座標を追い求める。本書の鍵語はpraxis（行動）、その起点が己の本来性（propre）に遡る。

この知savoirは本来性の内に理性として控える。

弁証法理性批判

Critique de la

Raison Dialectique

前進後退の部結語 | 了